

「自己のための恋愛」を繰り返す女子学生との面接過程

— 自己対象欲求の成熟による凝集的自己の獲得 —

井ノ崎 敦子*, 葛西 真記子**

(平成30年6月13日受付, 平成30年12月13日受理)

Counseling for a Female College Student with Problems of “Romantic Love for the Self” : The Acquirement of Cohesive Self by the Maturity of Selfobject Needs

INOSAKI Atsuko *, KASAI Makiko **

Many female college students are interested in romantic relationships. When they experience romantic love problems, they almost show their feeling of failure with the dissatisfaction of their primitive self-object needs, as well as their immaturity toward self and romantic relationships. Therefore, student counselors must empathetically understand such students' feeling of failure and help them develop their selves and their romantic relationships. Through an analysis of the counseling process of a female college student with romantic love problems, this study aimed to examine whether a student counselor's empathic understanding of the female student's feeling of failure in romantic relationships promoted the maturity of the student's self-object needs and the development of herself and her romantic relationships. The result of this study showed that the counselor continued to empathetically understand the student's feeling of failure, and the student's self-object needs matured and she also developed herself and her romantic relationships.

Key Words : romantic love, female college student, selfobject needs, cohesive self

1. 問題と目的

(1) 女子学生の恋愛

青年にとって恋愛は、重要な関心テーマの1つである(相羽, 2011)⁽¹⁾。例えば高坂(2013)の調査結果においても、約4割の女子学生が交際経験を持ち、他約4割の女子学生は交際未経験だが恋愛に関心を持っていることが認められた⁽²⁾。こうしたことから、恋愛が女子学生の生活の一部であり、かつ関心の高いテーマであることが窺える。

恋愛に関心をもつ女子学生にとって、恋愛関係を形成し、心が満たされるかどうか、学生生活に対する満足度にも大きく影響すると考えられる。

さらに、杉村(2001)⁽³⁾が、女子青年においては自己の発達と関係性の発達が連動していると指摘していることから、女子学生の自己の発達が、交際相手との関係性の発達から影響を受けやすいと推察される。

(2) 「アイデンティティのための恋愛」とそれ以前の恋愛

大野(1999)は、自我心理学者 Erikson の発達理論に基づき、青年期における恋愛を「アイデンティティのた

めの恋愛」と呼び、①相手からの賛美、賞賛を求めたい、②相手からの評価が気になる、③しばらくすると、のみ込まれる不安を感じる(相手の存在が大きくなりすぎて自分がなくなってしまうような不安を感じる)、④相手の挙動に目が離せなくなる(「相手が自分のことを嫌いになったのではないか」と気になる)などの特徴が顕著で、⑤結果として交際が長続きしないことが多いという5つの特徴をもつことを指摘している⁽⁴⁾。さらに、大野(1999)は、自身が実施した調査により、この段階の恋愛における関心は、相手の幸せを願うことではなく、相手に写った自分の姿に向かいがちであることを、明らかにしている⁽⁵⁾。そして、「アイデンティティのための恋愛」においては、交際相手から賞賛し続けられないと自分の心理的基盤が危うくなり、大きな不安と混乱の原因となり得ると指摘している⁽⁶⁾。

この「アイデンティティのための恋愛」におけるアイデンティティとは、「わたしとは誰であるか」という一貫した感覚が時間的・空間的になりたち、それが他者や共同体から認められているということの意味する(中島,

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

** 鳴門教育大学 (Naruto University of Education)

2011)⁽⁷⁾。また、アイデンティティの形成は、自我の機能の一部である(Erikson, 1959)⁽⁸⁾。そしてErikson(1959)は、自我とは、個人が経験を組織づけ合理的な計画を立てる中枢であると指摘している⁽⁹⁾。

自己心理学を創始したKohutは、自我が機能するためには、自己がまとまっている必要があることを指摘した。(Kohut, 1977)⁽¹⁰⁾。そしてKohut(1984)は、自己が持続性のあるひとつのまとまりになることを「自己の凝集性」と呼んだ。そして、凝集的な自己ではない自己の状態を、断片化した自己、すなわち自己の障害と呼んだ⁽¹¹⁾。さらにKohutは、自己の障害をもつ者は、自我を問題にする段階に進むことができないと指摘している⁽¹²⁾。つまり、自我が機能するのは、他者を自分とは違う独自の存在として認識し、扱うことができる自己を獲得した後であることを指摘している。従って、自己の障害をもつ青年が恋愛をする場合、自我機能を問題とする恋愛に進むことができず、自己の凝集性を求める恋愛に留まることが予想される。

(3) 自己心理学における自己の発達

前述したKohutの自己心理学における自己とは、人格の核をなすものを意味する(Wolf, 1988)⁽¹³⁾。そしてKohut(1984)は、自己の凝集性を獲得することを自己の発達と捉えた⁽¹⁴⁾。この自己の凝集性は、個人が自己の凝集性を支えられていると感じる対象、すなわち自己対象による共感的応答を受ける体験により獲得される。また、自己心理学では、自己対象によって個人が自己の凝集性を支えてもらいたいと願うことを自己対象欲求と呼ぶ。従って、自己心理学における自己の発達とは、自己対象から共感的応答を受ける体験を通して自己対象欲求が充足されて自己の凝集性が獲得されることを指す。

自己対象欲求の主なものには、鏡映自己対象欲求、理想化自己対象欲求、及び双子自己対象欲求の3つがあるとされている(Kohut, 1984⁽¹⁵⁾; Wolf, 1988⁽¹⁶⁾)。鏡映自己対象欲求とは、自分自身が唯一無二の存在である、という生得的な感覚を、自己対象から承認してほしいと願うことを意味する。2つ目の理想化自己対象欲求とは、堂々として誇らしいイメージをもつ自己対象に、自分自身を重ね合わせたいと願うことを意味する。3つ目の双子自己対象欲求とは、自分自身が、自己対象機能をもつ他者と同じ人間同士であると感じたいと願うことを意味する。自己心理学では、これら3つの自己対象欲求が満たされることで自己の凝集性が成立するとしている。ただし、これら3つの自己対象欲求のうち、どの自己対象欲求の充足が重要かは、その個人の状況によって異なる(Kohut, 1984)⁽¹⁷⁾。

さらにKohut(1984)は、それぞれの自己対象欲求自体が発達することを指摘している⁽¹⁸⁾。一般的に幼少期に

ある者は、自己対象欲求の完全な充足を求める傾向を示す。しかし、実際には幼児の期待どおりに完全な人間など存在しないため、自己対象欲求の完全な充足が失敗に終わることは避けられない。そこで幼児は自己対象欲求が完全に満たされないことによる不全感を味わうこととなる。この時、自己対象として機能する他者が、幼児の目線に立ち、幼児の不全感を十分理解する、つまり共感的に理解することができれば、幼児は不全感を否認することなく、そのまま受けとめる自己の凝集性を獲得することができるようになる。幼児は、この共感的に理解される体験を積み重ねることで、少しずつ、自己対象欲求の不完全な充足に耐えることができるようになるとともに、自己が不完全で限界をもつことを受け入れることができるほどの自己の凝集性を獲得するようになる(Kohut, 1984)⁽¹⁹⁾。

反対に、幼児が、自己対象として機能する他者から、自身の不全感を、軽視されたり非難されたりして、十分に共感的に理解してもらえないと、自己の凝集性は獲得されない。その結果、幼児期を過ぎて年齢を重ねた後も、自己対象欲求の完全な充足に固執しつづけることになる。それを自己心理学では太古的自己対象欲求と呼んでいる(Kohut, 1984)⁽²⁰⁾。しかし、その後の成長過程において、太古的自己対象欲求が満たされないことで生じる不全感を共感的に理解されると、自己対象欲求は成熟する。つまり、自己対象欲求は、生涯にわたり、共感的に理解されることで成熟する可能性をもつのである。

また、自己心理学では、自己対象欲求の成熟だけではなく、自己の欠陥を補う機能、つまり2次的構造(Kohut, 1977)⁽²¹⁾がつくられることも凝集的な自己の獲得に貢献すると主張している。従って、自己対象欲求の成熟が不十分な領域があったとしても、2次的構造によりその不十分さを補うことができれば、凝集的な自己を獲得し、日常生活に適應することができると考えられている。

(4) 「自己のための恋愛」の特徴

前述したように、自己の障害をもつ青年は、自我機能の問題の段階まで進むことができず、自己の凝集性を求める恋愛を享受することが予想される。そして、このような恋愛を享受する青年は、それまでの成長過程、特に幼少期において、太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感を共感してもらった体験が不十分であったために、自己対象欲求の発達が滞り、太古的自己対象欲求を抱えたままの状態にあると考えられる。このように、自己の障害があるために、自己の凝集性の獲得を求める恋愛を、本稿では「自己のための恋愛」と呼ぶことにする。ここで、自己心理学の観点から、「アイデンティティのための恋愛」と「自己のための恋愛」の違いを整理しておく。

「アイデンティティのための恋愛」は、凝集的な自己を

獲得できている者が示す恋愛であり、交際相手を自分自身とは別個の存在として認識した上で、交際相手に対して太古的ではない自己対象機能を求める恋愛である。それに対し、「自己のための恋愛」は、自己の凝集性が不十分なため、交際相手を自分自身と別個の存在と認識できず、交際相手に対して太古的自己対象として機能することを求める恋愛である。

なお、「アイデンティティの恋愛」における失敗は、アイデンティティの拡散の危機につながるおそれがある。それに対し「自己のための恋愛」における失敗は、自己の断片化の危機につながりやすいと考えられる。

これらのことから、「自己のための恋愛」は、「アイデンティティのための恋愛」よりも発達的に未熟な恋愛と捉えることができる。ただし、「自己のための恋愛」を享受する青年は、太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感を共感される体験を得られるならば、自己の凝集性を高めて、「アイデンティティのための恋愛」を享受できるようになると考えられる。

(5) 自己心理学的介入

自己の障害があるクライアントに対し、自己心理学的介入、すなわち太古的自己対象欲求への共感を行うと、クライアントは、過去に阻害された発達欲求を生き生きとよみがえらせる (Siegel, 1996) ⁽²²⁾。これを Kohut は自己対象転移と呼んだ (Kohut, 1977) ⁽²³⁾。そして、クライアントは、自己対象転移の中で幼児期に妨害された自己の欲求を再活性化させる (Kohut, 1984 ⁽²⁴⁾; Wolf, 1984 ⁽²⁵⁾)。そこで、太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感に共感されることにより、自己の欠陥を埋めることであれば、クライアントに治癒をもたらすことが可能である (Kohut, 1977) ⁽²⁶⁾。

(6) 本研究の目的

本研究の目的は、交際相手から振られたことを契機に来談した女子学生との約3年間にわたる面接過程を通して、「自己のための恋愛」を享受する女子青年がいかに凝集的な自己を獲得するか、という支援のあり方について検討することである。

具体的には、カウンセラーが学生の太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感を共感的に理解したことが、学生の自己対象欲求の成熟による自己の凝集性の獲得といった自己の発達をどのように促したか、また、「自己のための恋愛」から「アイデンティティのための恋愛」への発達をどのように促したかについて検討することを目的とした。

2. 事例の概要

A から事例公表の同意を得ているが、プライバシーに配慮して趣意を損なわぬ程度に事例記述に若干の変更を加えている。

(1) クライアント

A, 大学1年生, 18-19歳, 女性。

(2) 主訴

交際相手から一方的に別れを告げられて、心理的に混乱している。

(3) 臨床像

足を組んで余裕のある態度を演出しようとしているが、そわそわと落ち着きがなく、頻繁に髪を掻き揚げながら斜に構えて話す。笑うと、笑い声が面接室に響きわたるほど不自然に大きく、緊張感の高さを感じさせる。

(4) 家族構成

母親 (40代, パート職員), 姉 (20代, 会社員), 及びAの3人家族である。Aが小学校低学年時に、父親 (40代, 会社員) による母親へのドメスティック・バイオレンスが原因で、母親がAと姉を連れて家を出て以来、父親とは別居している。母親には別居以前から交際相手が存在する。

(5) 生活歴

幼少期より両親の仲が悪く、父親から母親への身体的暴力が度々あった。Aは、母親や姉との関係が悪く、「家の手伝いをしない」、「家に帰ってくるのが遅い」など、事あるごとに母親と姉の両方から責められて、窮屈な思いをしている。

大学では授業に欠かさず出席し、成績もほぼすべての科目で「優」の成績を修めていた。しかし、入学後にできた友人らとは放課後や休みの日に一緒に過ごすことはなく、その場限りの浅い付き合いに留めており、できるだけ明るく接することで、悩んでいることを友人らに気づかれないように警戒しながら接触していた。一方、ソーシャル・ネットワーク・サービス (以下, SNS とする) 上で知り合った学外の同世代の友人らには、悩みを相談するなど積極的に交流していた。

(6) 恋愛歴

Aが初めて男性と交際したのは中学生時であった。以降、数人の男性と交際した経験をもち、交際相手は、通っている学校で知り合った同年代の男性であった。これまでの交際では、すべて男性から交際を申し込まれて、恋愛感情をもたないまま交際を開始し、交際中も恋愛感情

が芽生えることなく交際を継続してきた。交際中に別の男性から交際を申し込まれると、それをきっかけにAが交際相手に別れを告げて、関係を終了させて、次の交際を始めるというパターンを繰り返していた。

(7) 見立て

Aは、幼少期から自己対象欲求を適切に満たすための共感的応答を受ける体験が不足していたと推察される。そのため、自己対象欲求の発達が阻害されて、自己の凝集性の低さを抱えていると考えられた。学業面での良好さや友人関係の使い分けは、そうした自己の凝集性の低さを、2次的構造である学業面での優秀さや友人関係の使い分けによって補うことで、学生生活に適応できていると推察された。

AにとってBに振られた体験は、Aの自己の凝集性を脅かすものであったことから、Aは「自己のための恋愛」を享受していたと考えられた。しかし、Aの太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感を共感される体験を積み重ねると、Aの自己が凝集化され、「アイデンティティのための恋愛」を享受できるようになると推察された。以上のことから、カウンセリングにおいて、Aの主訴に沿った形で、カウンセラーがAに共感的応答する、特に恋愛関係における太古的自己対象欲求が満たされないことによる不全感に共感するといった自己心理学的介入を行なうことが適切であると判断した。

(8) 面接構造

在籍学生の学生生活支援の一環として、大学内に設置されている学生相談室にて面接を実施した。個別相談の利用は予約制となっており、在籍学生及び保護者であれば誰でも無料で利用可能である。夏休みなどの休暇期間も通常どおりに面接を実施する体制をとっている。なお、Aに対しては、週1回50分のカウンセリングを継続実施し、休暇期間中も面接を実施した。

3. 面接経過

面接経過を3期に分けて報告する。「」はA、〈〉は筆者（以下、Co）、『』はその他の人物の発言である。

(1) 第1期：空回りの交際を繰り返す時期（X年12月～X+1年10月：#1～#34）

#1において、「幼馴染の男性Bから『自由になりたい。もう好きじゃない』と交際1週間後に振られたことで気持ちが混乱して死にたい気分になり、食欲も落ちた」と悲痛な表情で訴えた。何もかも嫌になり、何事にも意欲が低下したとのことであった。Bは中学生のときからの幼馴染であり、2ヶ月前に1年ぶりに再会したときに告白された後、何度も告白され続けた。当時、Aは別の男性

と交際していたが、その男性の浮気が発覚したので別れたいと思っていたこともあり、交際相手に別れを告げて、特にBのことを好きではなかったが、Bの申し入れを受け入れた。AはBから振られた原因として、Bに言われたわけではないが、Bに好意がなかったにも関わらず、BがAに好意を抱いていることに慢心して、交際後に四六時中一緒に過ごすことを求めて、一緒にいるときにはずっと身体を密着させるなどして甘えすぎたことにあると考えていることを明かした。ちなみに、Aは、これまでの交際相手に対して、一緒に過ごすことを自分から求めたり、身体を密着させたりしたことがないとのことであった。さらに、今まで数人の男性と交際したことがあるが、すべて男性から交際を申し込まれて、恋愛感情がないまま交際をしていた。そして、交際中に別の男性から交際を申し込まれると、その男性と交際するために、これまで交際していた相手を振ってきた。こうしたことから、これまで交際相手から振られた経験がなかったため、Bに振られたことは心理的打撃が大きかったとのことであった。Coは、好きでもない相手と交際することや、交際相手に急速に親密になろうとするあり方の背景に何か重大な心理的課題を抱えているのだろうと推測した。そこで、解決の糸口を見つけたいと思い、「もう少し交際相手と心理的境界をもてるようにしたほうがいいかもしれませんね」と軽く指摘すると、「そうですかね」と不自然に大笑いし、全く同意していないようであった。この反応を、CoはAが自分自身に問題はないと思いたいという太古的自己対象欲求のあらわれであると考えた。そこで、CoはAの自己を弱らせることのないように配慮をする必要性を感じたので、Aの主訴の解決に焦点を合わせて継続面接を行うことを提案したところ、Aは即座に了解した。その後、「Bに未練があったが（#2）」、「もうどうでもよくなった（#3）」、「彼氏をつくりたい（#3）」と態度を一変させて表情も次第に明るくさせた。あまりの気持ちの変わりようにCoは戸惑い、「え、そうなの？」と驚くも、AはCoの反応を全く気にしていない様子であった。#4にてCoが交際相手に求める条件を尋ねたところ、「自分の話を聞いてくれる人。見た目も大事」と即答した。この反応から、CoはAの自己対象欲求の未熟さを感じた。さらに、「交際すると別れがあるので怖い」と交際相手を失うことで自分自身が揺らいでしまう恐怖を滲ませた。また、Aは交際以外の人間関係についても触れ、「大学では本音話し合うような密な人間関係がないのでつまらない」と不満そうにした。Coが入学前までの友人関係の状況について尋ねると、「小学校でいじめを受けたあと、集団に入らず1人で過ごすようになった。大学では一応4人グループに入っているけど、仲はあまり良くない」と表情を歪ませた。この発言から、このまま面接を継続すれば、主訴の解決だけに留まらず、主訴の背景にある心

理的課題を扱うことができるかもしれないという期待がCoの頭をよぎった。しかし、#5では大学入学してから自分自身の心理的成長を感じられないことへの不満や同性の友人への不信感を話すも、「もう大丈夫」と継続面接の終了を求めた(#5)。Coは主訴の背景にある心理的課題を扱うことがAの自己と恋愛の発達を促すことにつながると考えたことから、そうした課題を扱うことなく面接を終えるのを残念に思った。しかしAの意思を尊重することにした。そして、「何かあればいつでも相談に来てくださいね」と伝えて、Aの申し出を了承した。

7ヶ月後、AはSNSで知り合って2ヶ月交際した社会人男性Cから突然振られて、前回と同じぐらい抑うつになったので相談したいとのことで再来談する(#6)。Coは、AがBのときと似たような交際をしてうまくいわずに抑うつになって困っているのではないかと心配していたため、Aが再来談したことで安心した。Aによれば、SNS上に別の女性と2人で食事したことについてのCの書き込みを見つけ、そのことをAに事前報告しなかったことについてCを責めたところ、『縛られるのは嫌だから別れよう』と言われて振られたとのことであった。Aは「納得できない」と苛立ちをあらわにした。Coが「Aとしては当然と思っていた指摘をしたのに、別れを切り出されたので納得できないですよ」と共感すると、大きくうなずいた。

Coは交際相手に依存せざるを得ないほど凝集性の弱い自己を強固なものにするという課題に粘り強く付き合っていくことがAにとって良いのではないかと考えた。そこで、Coが面接の再開を提案すると、Aは「よろしくお願ひします」と機嫌よく頭を下げた。

以降、Coは、Aの太古的自己対象欲求が満たされない不全感に共感することで、自己の凝集性を強化できるように対応し続けた。例えば、#7において、AがCから振られたことについて、「隠し事をした理由を聞いただけで振られるのはおかしい」といかにも不満そうに話した。それに対し、Coは、CがAの望んでいることと少しでも異なることを行なうのを許さないAには、Cから振られることは全く納得できないだろうと理解した上で、「おかしいですよ」とAの気持ちに寄り添って応答した。また、この時期のAは、#1でCoがAの心理的課題を指摘したときのように、少しでもAの感じ方にCoが共感していない言動をすると、不自然に大笑いをする反応を示し、一貫して同意しか求めない態度を示していたので、CoはAの自己対象欲求が太古的なものであると判断した。

#10にて、Aは、バイト先の社員数名が共同で起業をするために退職することを、残留する社員から教えてもらったことについて話した。Aは、退職者の中で特にAが信頼を置いて色々相談していたD(40代男性)から、退職することを事前に教えてもらえなかったことに大きな

ショックを受けていた。

また、「Aの夢であった職種Jに就くことを、人気が高いので就きにくいという理由で母親から反対されたので、仕方がないから諦めた」と落ち込んだ様子で話し、「家族がストレス。つらい」と涙を流した。そして、母親と姉から、帰りが遅くならないようにとか、家の手伝いをもっとするようになど注意をされて、生活態度を改めるように毎日のように責められることから、「母と姉が嫌いなので、卒業後に家を離れたい」と語った。

Aは3年生に進級して30代女性の指導教員のゼミに所属した(#12)。「指導教員から相当ダメな子だと思われている気がする」と語ったので、Coがその根拠を尋ねた。すると、Aは次のように語った。ゼミの途中であったが帰路のバスに間に合わないので、指導教員に挨拶をして帰ろうとしていた。ところが、まさに挨拶をしようとした瞬間、指導教員から先に『失礼しますというものですよ』と怒られてしまったため、挨拶もできない学生だと否定的に評価されていると思って落ち込んだとのことであった。それ以外で特に否定的評価を受けているわけではなかったことから、Coは、指導教員からの些細な注意だけで自己否定を強めるAの様子から、Aの自己の凝集性の低さを感じた。

「K県に進学した出身高校が同じ男性の先輩Eから遊ぼうと言われているがどうすればいいか」とCoに尋ねる(#13)。Coが尋ねた理由を確認すると、ある友人が『男を次々変えている』と別の友人を非難していたので、自分も同じように思われているのではないかと心配とのことであった。指導教員のときと同様の悲観的思考であるが、自分自身に目を向けることができるほどAの自己の凝集性が高まりつつあると思いつつ、「なるほどね」と言うと、AはCoに自分自身の気持ちを理解してもらったことに満足しているかのように、深くうなずいた。

続いてAは自分から両親に関して次のような話をした(#14)。Aが幼稚園児だった時に、父親は母親に暴力を振るうとともに、母親に常に家にいることも強制していた。その状況の中で、母親は父親以外の男性と交際し始めた。当時、母親は度々、Aと一緒に喫茶店に行っては携帯電話で交際相手と電話をしており、それがとても嫌だったとのことである。また、Aがこの電話の相手が母親の交際相手だとわかったのは、小学校高学年の時であったと語った。

Aが小学校低学年の時に母親はAと姉を連れて家を出て父親と別居した。父親と別居してからは、食事中でも交際相手から電話がかかってくる、交際相手が怒るのを恐れて母親は電話に出る。現在も母親は同じ男性と交際を続けている。「母は自由に夜中でも出歩いているくせに、Aが夜中出歩くことを禁止してくる。勝手すぎる」と泣き、「大学卒業したら母親から離れるのが夢」と話し

た。この母親との間の体験は、これまでもAが話していた交際相手や指導教員にまつわる傷つき体験の痛みと比べのものにならないほど、激しい心の痛みであることがCoに伝わってきた。そこでCoは、Aの自己の凝集性の弱さは、母親の共感不全による太古的自己対象欲求の満たされなさが原因であるのではないかと推察した上で、Aの心の痛みを受けとめて〈そうなんです〉と共感的に応答した。すると、Aは安心した表情を示した。

「母に職種Jを諦めたことをいつ言おうか迷っている」と語った(#15)。さらに、「できれば就職と同時に家を出たいが、母はAにそばにいてほしいようにしている。家を出たいと母に言えば、もめそう。考えただけで憂うつ」と嘆いた。Coは、Aにとって母親の意向が非常に重要な判断基準であることを感じつつ〈憂うつですね〉と応答した。

#16にて、Aが休暇期間ぐらいは羽目を外してもいいだろうと判断して、#16の前日に小遣いを多めに使った後、母親に報告すると、母親から叱られたことをくやしそうに訴えた(日常的に母親がAの小遣いの使い道を細かく管理していた)。そして「父のところに行きたい」と語った。Aは父親に年に数回会っており、母親と比べるとAの話に耳を傾けてくれて、成績が優秀であることも評価してくれているとのことであった。しかしCoは、父親が母親にDVをしていたと聞いていたので、父親との関係が安全なのか気になり、〈お父さんはAに対して暴力をふるわなかったのですか?〉と尋ねると、Aは「母や姉と一緒にいるときに父が皿や扇風機を投げつけてきたことはあるけど、手を挙げられたことはない」と平然と言った。Coは、Aが自己を安定させるために、父親のことを美化する必要があるのだろうと思うと同時に、このままでは他者と安全な関係を築くのは難しいのではないかと不安になった。そこで、Coとの関係が、Aにとって安全な関係の体験の1つとなり、その体験をもとに生活においても他者と安全な関係を構築できるようになることを願いつつ、〈お母さんとお父さんにどのように頼るか、難しいですね〉とAの心理的葛藤に共感しながら応答すると、Aは静かにうなずいた。

Aが「職種Jに未練が少し残っているけど、母親に止められただけではなく、自分でも職種Jに就くための準備をすることに負担を感じるようになってきたので、もう目指す気はなくなった」と話した(#18)。そこで、以前からAが少し興味を示していた職種Lへの就職を検討することをCoが提案すると(#18)、すぐに職種Lの就職対策講座を申し込み、受講し始めた(#19)。CoはAが主体的に自分自身の進路を検討するようになったことに安心する一方、AのCoに対する依存が強まっているように感じ、それはAがCoに対して自己対象転移を向けているあらわれであると理解した。

最近、母親と姉の仲が悪化していること、そのことで母親が姉を頼ることを諦めて、Aが卒業後に家を出ることを引き止めて経済的にAに頼ろうとするのではないかと思ひ、心配していることを話した(#20)。「母に職種Lに変更したことを報告すると『あっそう』とそっけなかった」と残念そうにする。CoにもAの残念な気持ちと淋しさがひしひしと伝わってきた。Aは母親から卒業後も一緒に暮らそうと言われて困っていたが(#21)、Aが思い切って母親に卒業後に一人暮らしすることを望んでいることを話したところ、同意を得ることができたと嬉しそうに話した(#23)。それを聴き、Coは、Aの自分自身の生活を大切にしようとする意識が強まっていると感じた。

#22ではSNSで知り合った男性Fに好意をもったと話した。Fが他の女性と交流していることに嫉妬していることをFに伝えると『嫉妬してくれて嬉しい』と言われ(#23)、『Aを特別な存在と思っている』とも言われて嬉しかったと話した(#27)。しかし、その後、Fと何度かデートしたのちに、他の女性への嫉妬を再びFに伝えると、『もう会うのをやめようと思っていた』と別れを告げられたとのことであった。ただこれまでのような話し合いのないままの別れ方と違い、別れを告げられたときにFと話し合うことができた。その話し合いのときに、Fから、F自身の目標実現のための時間の確保を優先したいのでAの望みどおりに一緒に過ごす時間を取れないことを謝られた。AはFにAの淋しさを理解してもらえたと感じたので、納得して別れを受け入れることができた満足した様子であった(#33)。

次の#34には気持ちを切り替えて失恋に伴う落胆は全く見せず、改めて職種Lを目指す強い覚悟を示した。

CoはAがこれまで自己の立て直しのために次の恋愛へと進んでいたありかたから、自己の人生設計という生産的な方向へと進むようになったのは、自己のまとまりが強固になりつつある証拠と捉えた。そこで、Aが職種Lに就くために努力していることを嬉々として話したのに対し、CoはAが自分自身を誇らしく思っている気持ちに共感しながら、〈頑張っているね〉と応答した。

(2) 第2期:手ごたえのある恋愛関係を体験する時期 (X+1年9月~X+3年6月:#35~#68)

高校の同級生の男性Gが今の交際相手と別れてAと交際したいと言ってきたので、しばらく迷った結果(#35)、交際し始めた(#37)。これまでであれば交際開始時のAの表情はいつも明るかったが、今回は浮かない表情を見せているので、Coは不思議に思いつつ黙っていると、「時々理由もなく死にたい気分になる」とつぶやいた。これまでならば、Aが死にたい気分になったと言うのは恋愛関係が破綻した時だったので、今回のように交際開始時にAが死にたい気分になることにCoは違和感を覚えた。〈死

にたい気分になる原因として思いつくことは何ですか?)と尋ねたところ、Aは、母親からの小言が多くなり、言い合うことが増えて、気分が沈んでいることを挙げた。Coは、Aの自己の凝集性が高まったことで、母親に受け止めてもらえないことによる抑うつ感が恋愛によって紛らわせなくなっているのだろうと推測した。続いてAは「(心理的に)健康になるための方法を知りたい」とCoに答えを示すことを数回繰り返して求めた。それに対しCoは、Aが自己の凝集性を高めたいのではないかと考え、「Aの希望を大切に現在の生活を送るように努めると良いのではないのでしょうか」とゆっくりした口調で提案すると、「効果があるかも」とAは目を輝かせて言った(#40, #41)。また、「もっと自信をもてるようになりたい」と言い(#42)、Aの努力が実り、職種Lに就く可能性が高まっているにも関わらず(#43)、職種Lに就ける自信の無さから他の職種への就職活動も並行させた(#44, #45)。そんな中、職種Lの就職準備講座で知り合った女子学生1人と悩みを相談し合うほど親密になり、「やっという人間関係がつくれた」と喜んだ(#45)。Coも、カウンセリングでのCoとの関係の体験によってAの自己の凝集性が強固になったことで、同性の他者との有効な友人関係を形成できるようになったと思い、「良かったですね」と共感した。一方、職種Lの準備に力が入らなくなったと嘆いた。その理由として、第一志望大学の入学試験時に、予想以上に受験者が多かったこともあって不合格となったことへの不満が未だにあることを語った。そこでCoが、受験者が多かったことがAの不合格の要因になっていたかは定かではないが、その可能性はないとは言えないと考え、職種Lを目指す人数が年によって極端に増減がないという近年の動向を踏まえて、「大学受験とは違って、予想をはるかに超えた人数の人が職種Lに挑戦することは通常ないと思うのですが」と指摘すると、Aはすぐに「そうかもしれない」と納得した(#46)。

就職活動にまつわる話題と並行して、Aは交際していたGと大喧嘩をして、死にたい気分になったと嘆き(#44)、「Gを煽って、わざとGにAを振らせた」と自暴自棄的な行動に及んだことを告白した(#47)。CoはAが恋愛関係における統制力を高めている点では自己の凝集性が強固になっている証だと思う反面、自暴自棄的に関係を破壊してしまう自己のもろさも依然残っていると判断し、引き続き、Aの情動の背景を理解しながら共感することで良好な治療関係を維持してAの自己を支え続ける必要性を強く感じた。

#48と#49では、他のゼミ生にやさしい指導教員がAにだけ厳しいことに落胆するとともに、Aに対して相変わらず口うるさく帰宅時間が遅いことや家事を手伝わないことについて注意してくる母親への怒りを示した。

また、新たに好意を寄せたSNS上で知り合った男性H

のSNS上の書き込みを覗いたところ、Hが他の女性にも言い寄っていることがわかり、そのような(気の多い)男性に魅力を感じるA自身に嫌気が差し、「本気で死にたくなかった。淋しさをなくしたい、自分ひとりで何でもできるようになりたい」と嘆き、死にたくなる気持ちは他者から見捨てられる淋しさから生じていることを初めて語った。Coは「淋しいですよ」とAが感じている淋しさに共感した上で、その淋しさを抱える力をもってほしいと願いながら、「淋しさを全くなくすことは難しいでしょう。淋しいときに自分で自分を慰める方法をもっておくとよいと思います。また、卒業して就職すれば、その分自信が高まるので、少し人に頼りたくなる気持ちも減るかと思えます」と自立への希望をもち、行動することを勧めると「そうですね」とAの表情が明るくなった(#50)。

そんな中、バイト先の元同僚の男性Dから徐々に連絡があり、何度か遊びに誘われて会っているうちに、『女性として魅力的』と言われたと喜ぶ。AはDからの誘いを、Aの高い仕事能力を見込まれてのDの会社への就職の勧誘であると理解していた。「Aが夜中は無理だと伝えていながらも関わらず、夜中に2人きりで会いたいと毎日のようにメールをしてくる。引き抜きを考えているにしても焦りすぎだと思う」と暢気に構えていた。Coは、Dが夜中に2人きりで会いたいと要望しているのはデートの誘いであると考えたので、Aの鈍感さに苛立ちつつ、「それは引き抜きではなく、口説かれているのではないのでしょうか」と厳しい口調で指摘した。するとAはびっくりした表情をして驚き、「Dは最近再婚したばかりだし、Aと同じ年齢の娘がいるのでそんなことは考えにくい」と笑って即座に否定した。Coは先ほどの口調は厳しすぎたと反省し、今度はAを過度に不安にさせないように配慮しながら、「そうですね。でも十分気をつけてくださいね」とやんわり警告した(#51)。AはDと高校生ごろから交流があり、その当時からDの教養の豊かさと知性の高さに強い憧れを抱いており、Dに恋愛感情を持ち続けていたことを語る(#52)。その後、AはDから好意を向けられていることを認め、週に1回の頻度で、AはDと深夜に2人で食事をして、「高校生の時は好意を示しても無視されていたのに、今さらなぜ興味をもたれるのか不明」と憤慨しつつ嬉しそうにしていた(#53)。「Dから『愛人になってほしい』と言われた。意味がわからなくて悩んでいる」と悪い気がしないといった雰囲気でも暢気に言うので、Coは怒りを抑えながら淡々と「それは肉体関係を持つとうということだと思います」と指摘した。するとAは、ハッとした表情をしたが、「Dは高血圧なのでセックスできないと言っている」と懽然とした態度で強く反論した。Coは苛立ちを滲ませつつ「Dは肉体関係のないプラトニックな関係を求めているということですね」と釘を刺すと

「そんな感じ」とあっけらかんとしていた。その一方で、「愛人ということは二番手ということなので、それがくやしい」と話した (#54)。Co は、A が D を美化することで太古的自己対象欲求を満たそうとしているとわかったが、D を美化することで D に恋焦がれる気持ちになっていることに Co は少し共感しづらさを感じていた。そこで、Co は可能な範囲で、A の恋愛感情に共感するように努め続けた。

A は、D が 2 度結婚していることが理解できないと言いつつ、「私は結婚するつもりはない」と断言した (#55)。D からいつものように口説かれたので、A が「本気になったらつらくなるのがわかっているのでセーブしている」と D に告げると『俺もだ』と言われたと惚気た (#56)。D は『本気で A を気に入っている』と言うが、そうではない気がすると警戒心を示した (#57)。Co は、A にとって D との時間は A にとって大切な時間であろうと思ったので、A に冷静になるように諭したい気持ちを何とか抑えて、A が D との交際に関して楽しそうに話すことに可能な限り共感して耳を傾け続けた。しかし、ほどなくして「D からの連絡が減った。気持ちが冷めたのかな」と不安を示すようになった (#59)。Co は、D が A への関心をなくしているのだから、A が D にもて遊ばれる危険性は減ったと考えて安心した。しかし、それと同時に、D との接触が減って、A が淋しく感じていることを思うと、胸が痛んだ。

これまで A は D に会うたびに卒業研究の相談に乗ってもらっていた。そこで、A が D に卒業論文のテーマを指導教員に許可してもらった喜びをメールで報告すると、『よかったね』と返信が来たが、それ以外の連絡がないとのことで、「D の気持ちが冷めたんだと思う」と落ち込んだ (#61)。それに対し、Co はいたたまれない気持ちになり、〈冷めたのかな・・・〉と言いながら、A の淋しさに共感した。以前の A であれば、交際相手との関係が悪化すると、すぐに「死にたい気分になった」と訴えていたが、今回はそうではなく、「淋しい。連絡がほしい」と暗い表情で繰り返し自らの望みを主張した。この発言から、Co は A が以前よりも淋しさを抱える力が育ってきているので、望みを主張できるようになったのではないかと考えて、〈連絡あるといいですね〉と共感的に回答した。しかし、結局その後も D から連絡がなく (#62)、待つことに疲れたので A からメールで別れることを伝えようかと思った矢先 (#63)、D から連絡があり久々に会ったとのことであった (#64)。「D に A 以外にも交際相手がいるか尋ねたら、『A 以外の交際相手はいない』とはっきり言われたけど、安心できない」と話した。その後、D からの誘いを受けて会う約束をしては、直前に用事が入ったとの理由で D からキャンセルされることが数回繰り返されたことから (#65-67)、A は D との交際継続への希望を失くし、

「もう D の連絡を待たなくなった」と淋しそうに話した (#68)。なお、D との交際中、A は就職活動に力を入れず、「このまま (卒業後も) バイトでもいいかも」 (#65) と将来に対して投げやりな姿勢が見られたが、D からの連絡が途絶えるようになってからは就職活動や卒業論文作成に再び精を出すようになった (#68)。Co は A が D を失ったことによる淋しさを抱えることができたこと、また自暴自棄な行動を起こさずに、就職活動を再開させるといった建設的な方向に動き出したことから、ずいぶん A の自己の凝集性が高まったものだと感心した。

(3) 第 3 期: 互いを認め合う恋愛が芽生える時期 (X+3 年 6 月～X+4 年 3 月: #69-#91)

SNS で知り合った 1 歳下の男性 I が色白で知的 (#69) と、まさに A の好みのタイプで気になっており、「I からも会いたいと言われているが、会えば嫌われるのではないかと不安に思っている」と話した (#70)。メールのやりとりで I の希望にあわせてばかりになり不満だと言うので、〈A の希望を今までよりも 1 割増やして伝えてみるように意識してみてもどうですか?〉と提案すると、素直に「そうしてみる」と受け入れた。そして早速実行し、I と一緒にしたい活動を提案したら賛同してもらえたと喜んだ (#71)。

その後、A は I の SNS 上の女性の交友人数がかなり多いことから、相手にされるわけがないと思ひ込み、しばらく I に連絡せずにいた。しかし I と親しくなりたいという気持ちを諦められず、勇気を出して I にメールを送った。すると、すぐに I から返事がきたことで、I に嫌われていないとわかって安心したと嬉しそうに話した (#74)。

初めて I と会う約束をして (#75)、会った後、SNS 上で A から I に「友達になれたかな?」と確認したら『A のことは良い人だと思っている』とはぐらかされたと落胆した (#77)。しかしその後、「I からスカイプで『本当に楽しかったですか?』と何度も訊かれた上、『I も死にたい気持ちになることがある』と素の姿を見せてくれたので、以前よりも I との距離が縮まったと感じた。嬉しい」と表情を明るくさせた (#78)。Co はこれまでの A のように性急に恋愛対象と親密になろうとするのではなく、相手の気持ちを尊重しつつ関係を深めていこうとしている A の姿をほほえましく思いながら、〈I との距離が縮まって良かったですね〉と I に想いを少しずつ受け入れてもらっている A の嬉しさを感じながら、聴いていた。

しかし、すべて順調というわけではないようで、#80 では、今でも「わけもなく、急に死にたいという気持ちになる」と言った。続けて「でも、前みたいにか何かあればすぐに死ねばいいんだと思えなくなっているのがショック」と語った。これらの発言から、Co は A の思い通りにいかない現実と直面することによって自己が揺らぐこと

はあっても、今までのように自己の凝集性が危うくなることはなくなっていると感じた。さらに、このように自己の凝集性が高まったおかげで、AはIとの関係を丁寧に深めることができているのではないかと考えた。その上で、〈死ねばいいと思えなくなったのは、それはそれでつらいですよ〉と共感すると、Aは大きくうなずいた。

そして、AはIとデートしたことを喜んだ後(#81)、最近、死にたい気持ちが収まっていることを報告した(#82)。また、Iから一緒に趣味の活動を始めることを誘われ、「Iに認められた。嬉しい」と話した(#84)。

#86にて、職種Lの最終面接で手ごたえがあったことに安心した。その後、SNS上で新たに知り合った同年代の女性2人と頻りに交流するようになるとともに、「Iが卒論の完成を楽しみにしてくれているので頑張ろうという気になっている」と喜んだ(#87)。

#88において、職種Lの内定を得たことを母親に報告したところ、『自分がいろいろと進路について条件を出したので、Aを我慢させていたのではないかと心配していた』と言われたことを他人事のように報告した。Coがこの母親の発言に対する感想を尋ねると、Aは「進路選択にほとんど影響なかった」とあっさり回答した。

その後、Iとのデートの報告を楽しそうにする(#89)も、面接への動機づけが低下し、無断キャンセルを1回した後しばらく来談しなかった。Coから予約日の1週間後に連絡を1度入れてみたが、反応はなかった。#89ではCoとの関係がなくてもやっていけるほどAの自己の凝集性も強固になってきているように感じていたので、来談が途絶えたこともその現われではないかと考えていた。すると2か月経ってから突然来談し、卒業論文を提出した報告とともに、指導教員に対する不満を訴えた(#90)。「もっと早く(相談室に)来たかった。卒論に追われて来れなかった」と興奮気味に訴えた。卒業論文で扱う題材に理解を示さない指導教員に対して納得ができず、指導教員に心を閉ざして他人行儀な振る舞いを続けていると、指導教員から『愛想がない』とか『感情的になって教員と学生との関係を踏み外さないように』とか言われて嫌気が差して、適当に「はい、はい」と返事をしたら、『「はい、はい」ではわからない!』ときつく怒られたことを嘆いた。また、Aが卒業論文を提出した後ゼミの先輩の修士論文作成を手伝うために研究室に行くと、指導教員から『やる気がないなら帰って』とあしらわれたとのことであった。Aはその指導教員の対応に怒りを感じ、その出来事の後ゼミに顔を出していないことを興奮して話した。ゼミを休み始めてしばらく経ったときに、これまで悪い態度を採ってきたことを反省したので、同じゼミの仲間にはせかされたのをきっかけに謝罪するメールを指導教員に送ったが、返信メールで『メールもいらぬ』と関わることを拒否されたとのことであった。「このまま指導教

員に会わずに卒業してもいいが、指導教員のすべてが嫌いなわけじゃないので、どうすればいいかわからない。友人に手紙をたくそうかと考えている。ただ今回のことでは全く死にたいとは思わなかった」と話した(#90)。この指導教員との間で起こった出来事から、CoはAには自己対象欲求のさらなる成熟が必要であると感じた。と同時に、指導教員から非共感的な対応を受けたとしても、今のAであれば、自己の凝集性をさほど失うことはない判断し、Aの判断に委ねることにした。

最終回(#91)では、Aは卒業式終了後に指導教員に関係の修復を申し出たが、『Aの態度が悪いので、指導するのを途中から諦めました。あなたにはまだ怒っています』と言われ、「結局、関係を修復できなかった。悲しい」と嘆いた(#91)。それに対し、Coは〈残念でしたね〉とAの悲しみに共感した。

その後、Aは卒業半年後にCoを訪ねてきた。「職場で同僚の先輩たちからかわいがってもらって、Iとも仲良くしている。今が一番幸せ」と明るい表情で語った。

4. 考察

(1) Aの自己と恋愛関係における変化

Aは、学生相談室に来談する以前において、学業で優秀な成績を修めることや友人関係の使い分けといった2次的構造を形成できていたことにより、学生生活に適応できていた。しかし、交際開始から1週間という短期間でBから振られたことが、Aの自己の凝集性を脅かし、学生相談室での支援を要したと考えられる。

Aは、それまでの交際経験では、交際を申し込んできた相手に対して恋愛感情をさほど抱かないまま交際を始めていた。恋愛歴に記したように、交際中に別の者から交際を申し込まれると、交際相手に別れを告げて、新たな交際を始めるというパターンを繰り返していた。これまでの恋愛では、Aは交際相手に自己対象として機能することを求めていなかったため、このような交際関係のパターンを繰り返していたと考えられる。しかしBに対してはBがAの一部であるかのような関係をBとの間で形成することを求めたことから、Bには太古的自己対象機能を求めたと推察される。よってBから振られたことはAの自己の大きな揺らぎを生み出したと考えられる。Aの生育歴からは、大学入学以前から自己の凝集性の低さがあったと推察される。それに加えて、希望していた大学に進学できなかったことでさらに自己の凝集性が低下したので、自己の凝集性獲得の必要性が高まったと考えられる。そこでAは、以前からの自己対象であった幼馴染のBに対し、太古的自己対象機能を求めたと推察される。つまり、AのBとの恋愛関係は、太古的な自己対象欲求を満たして凝集的な自己を獲得しようとする「自己のための恋愛」であったと推察される。

こうして太古的自己対象機能として求めたBを失い、自己が断片化したAは、凝集的な自己の獲得を求めて学生相談室に来談したと考えられる。

面接開始して次第にAは自己の凝集性を高めた。そして5回目の面接において、Aはある程度、自己が凝集化されたことに満足し、面接の終了を求め、Coも受け入れた。しかし、中断7ヶ月後、#6にあるように、次に交際したCにより太古的自己対象欲求が満たされなくなったことで再び自己の凝集性が不安定となり、来談した。AはCに対してBと同じように太古的自己対象機能を求めている。しかし、Cとの間では2ヶ月と、Bとの交際期間よりも長い期間、関係を継続させることができた。これは、Bとの交際時よりもAの自己が凝集化していたことを示していると考えられる。

また、Aは#5までと異なり、Aの発達欲求の阻害された始めた幼少期のことも語るようになった。具体的には幼少期から現在にわたって体験してきた母親によるAの気持ちを軽視した対応にまつわる淋しさや悲しみを語るようになった(#10, #14, 及び#16)。この変化は、現在の自己の凝集性の低さのおおもとの原因である、母親との間での太古的自己対象欲求の不全感を扱うことができるほど自己の凝集性が高まった証であると考えられる。

その後、Aは母親からの自立を求める発言をするようになった(#18 及び#23)。これは、Aの自己対象欲求の成熟の兆しであると考えられる。

第1期の終盤の#33において、Fと別れる過程において、Aの主張を押し付けるのではなく、Fの言い分も聞く姿勢を示した。これは、Aの自己対象欲求が、交際相手を自分自身と別個の存在として認識できるほど成熟した証と考えられる。

第2期の#37において、Aは、自身の心理的健康への関心を高めるようになった。Gとの交際が成就したにも関わらず、Aの死にたい気分が収まらなかったことから考えると、この心理的健康への関心の高まりは、Aが、自己の凝集性の実現を交際相手に求めるのではなく、自らの力で自己の凝集性を獲得できるようになることを求め始めた証と考えられる。

また、#37からAは、母親による共感不全が自分自身の心理的健康さを獲得することができない大きな原因の1つであるとの洞察を示した。これは根本的な自分自身の課題に向き合うことができるほどに自己の凝集性が強固となったことの現れと推察される。

さらに、交際相手のGに対しては、#47で語ったように、衝動性の統制困難さを示しつつも、自己の揺らぎの兆候を示すことはなかったことや、Hに恋愛感情を持ったことで、恋愛対象に太古的自己対象機能を求めることへの嫌悪感とともに自立欲求を示した。これはさらに自己の凝集性が高まった証と考えられる。

その後、Aは高校生の時から憧れていたDから交際を申し込まれた(#51)。AはDとの交際を開始するも、性関係は拒否した(#54)。また、Dとの交際は、約4ヶ月間続き、Aが交際相手に恋愛感情を抱く交際をするようになってから、最も長い交際期間となった。Dに求めているものも太古的自己対象機能であったが、Dによる共感的応答のおかげで交際は順調に続いたと推察される。しかし最終的にDがAとの連絡を絶ち、Aは太古的自己対象欲求を満たせなくなった。ところがAは自己の断片化を起こすことなく、就職活動や卒業論文作成に力を注いだ(#68)。これは、AがDとの交際と別離を経て太古的自己対象欲求を成熟させることができ、就職活動や卒業論文作成という現実的課題達成につながることができた証と考えることができる。

第3期になると、新たにIというAの求めている条件を満たす同年代の男性に好意を寄せて親しくなった(#70)。Aは、これまでの交際のように、早急に一心同体的な親密さを求めるのではなく、Iの気持ちに配慮しつつ、丁寧に信頼関係を構築する形をとった。また、趣味や価値観など、人格的な面での魅力を感じ、それを親密になるかどうかを判断する重要点と見なす姿勢を示した。これは、Aが自己の凝集性を獲得できたことでIをAとは別個の存在と認識できたこと、そしてIの反応によって自己規定をしようとする、「アイデンティティのための恋愛」を享受している証と捉えることができる。

以上に示したとおり、Aは恋愛問題の解決を主訴として継続的なカウンセリングを受けることにより、自己対象欲求を成熟させて自己の凝集性を獲得することでできた。それと並行して、恋愛関係も「自己のための恋愛」の享受から「アイデンティティのための恋愛」を享受できる段階にまで発達させることができた。

(2) Aの自己対象欲求の変化

第1期におけるAのBやCに関する発言から、BやCに求めているのは、別個の存在である者同士の関係ではなく、他者と融合した関係であった。これは、1週間や2ヶ月といった短期間しか交際していない相手を失ったことによるAの自己の揺らぎの大きさからも窺える。また、他の女性と食事に行ったことの事前報告がなかったことでCを強く責める行為は、CにAの気持ちを最優先に考えて、偉大で完全である存在として承認してほしい気持ちの表れと推察される。これらのことから、AがBやCに向けていたのは、太古的鏡映自己対象欲求に相当していたと考えられる。

また、Aは、BやCとの恋愛関係にまつわる不全感を語ることに並行して、交際相手に気を取られていた母親から大切に扱われてこなかった淋しさや、現在の生活においても生活態度を注意され、志望職種への理解を得ら

れないつらさなどを語っていた。これは、恋愛における不全感の背景に、鏡映自己対象欲求を母親から期待どおりに満たしてもらえないことへの不全感との関連性を示唆していたと考えられる。つまり、AがBやCとの恋愛問題で心理的危機に陥った原因は、母親への太古的鏡映自己対象欲求の充足不全を根源とする太古的な鏡映自己対象欲求への固執であったと推察される。

また、第1期の終盤において、AはFと交際したのち、納得のいく形で別れることができた。AはBやCと同様に、Fに対しても、自分一人だけに関心を向けてほしいといった、太古的な鏡映自己対象欲求の満足を求めている。しかし、BやCとの交際時とは異なり、別れ話をした時にFからの共感的応答を受けることができた。BやCに比べると、Fの共感性が高かったと考えられるが、Fの共感性を引き出せるほどAの自己対象欲求が成熟していたので、別れ話の際にAがFに共感される体験を得ることができたと考えられる。従って、Aの自己対象欲求は、BやCとの交際時に比べてFとの交際時のほうがやや成熟していたと推察される。

以上のことから、第1期のAにとって重要な自己対象欲求は、太古的な鏡映自己対象欲求であったと考えられる。

続く第2期においては、Aが高校生時から強い憧れを抱いていた年長のDからの熱烈な誘いを受けて、Dとの交際を開始させた。AはDから女性的魅力の高さを評価されるとともに、仕事能力の高さも評価されたことを喜び、さらには交際相手としてDを独占できていることを喜んだ。また、Dは、それまでのAの交際相手とは異なり、Aに対して卒業研究に関する有益な助言をし、Aの示す激しい嫉妬を寛容に受けとめる頼もしさを備えており、そうした態度にAも居心地の良さを示していた。こうしたことから、DはAにとって、太古的な鏡映自己対象であるとともに、太古的な理想化自己対象として機能していたと推察される。そして、AはDとの交際において太古的な鏡映自己対象欲求と理想化自己対象欲求の充足を経験したことにより、精神的な安定を見せていたと考えられる。以上のことから、第2期のAにとって重要な自己対象欲求は、太古的な鏡映自己対象欲求と理想化自己対象欲求であったと推察される。

その後の第3期では、Aが求めている条件を満たす同年代のIとの交際を開始させる。Aは、Iから独立した存在として認められることと同時に、趣味や価値観を共有することに喜びを見出していた。また、Iと他の複数の女性との交流を気にしつつも、Iの幸せを願うことができるようになり、IをA自身とは別個の存在として尊重する姿勢を示すとともに、これまでの交際相手に対してのように、Iを完全に独占することにこだわって嫉妬をむき出しにすることはなかった。

また、第3期において、Aは、すでに第2期に成立させることができるようになっていた同性との親密な友人関係を、安定的に構築できるようになった。友人関係は恋愛関係よりも互いの精神的自立が要求される関係であることから、恋愛関係以上に、自己対象欲求の完全充足を求めても実現の可能性が低いと考えられる。従って、Aが親密な同性との友人関係を安定的に構築できたことは、SNS上で構築された関係という点で慎重に判断する必要はあるが、太古的鏡映自己対象欲求を放棄できていることを意味していたと推察される。これらのことから、第3期のAにとって重要な自己対象欲求は、ほどほどの満足で良いとする成熟した鏡映自己対象欲求と双子自己対象欲求であったと推察される。

以上に示したように、Aは、第1期では、太古的な鏡映自己対象欲求、第2期では、太古的な鏡映自己対象欲求と理想化自己対象欲求、そして第3期では、成熟した鏡映自己対象欲求と双子自己対象欲求といったように、時間を経るごとに重要な自己対象欲求を変化させつつ、自己対象欲求を発達させていたことが窺える。

(3) AとCoとの二者関係の変化とCIの変化との関連

第1期において、5回の面接までの間にCoの太古的な鏡映自己対象欲求が完全に満たされないことによるAの不全感への共感の効果により、自己の凝集性が高まりを見せた。その凝集性の高まりは、自己対象欲求の十分な成熟によるものではなかった。#5にて、Aが自分自身や対人関係における停滞感を訴えて、発達欲求の再活性の兆しを示していたにも関わらず、カウンセリングへの動機づけの低下を示した。これは、Aの主訴に沿った形でCoが面接を重ねていたことから、Aがとりあえずの凝集性の獲得に満足したことによると考えられる。

しかし、2ヵ月後にAは再来談した。これは、5回までの間でCoがAの太古的な鏡映自己対象欲求が満たされない不全感に共感したことで、幾分かCoの共感的応答により鏡映自己対象欲求が満たされ、Coとの間で自己対象転移が生じていたことによると考えられる。

このAの再来談に対し、Coは5回目までと同じように、Aの太古的鏡映自己対象欲求が満たされない不全感への共感を続けた。

第1期のAは、Coに対して、自己対象転移を向け、母親による共感不全によって発達が阻害されていた太古的な鏡映自己対象欲求を満たすことを求めているので、Coの指摘に対して強い抵抗を示していたと考えられる。そして、このCoとCIの関係と並行するように、Aは、「自己のための恋愛」を重ね、交際相手にも太古的な鏡映自己対象機能を求めている。その中でも、あとの交際になるほど、交際相手の視点を認識できるようになる、自己の凝集性の兆しを見せていた。

また、#10 や #14 のように、母親の共感不全により A の自己対象欲求が成熟せず、A の自己の凝集性が低い状態にあると理解した上で、A が母親との間で体験していた、自己対象欲求が満たされないことによる不全感に Co が共感し続けた結果、A は次第に自己の凝集性を高め、自己洞察 (#37) や母親からの自立 (#18, #19, 及び #23) を示すようになった。

そして第 2 期には、Co の指摘に対しても目立った抵抗を示さず、素直に受け入れる姿勢を見せるようになっていった鏡映自己対象欲求の成熟の兆しを見せた。すると、A は太古的な理想化自己対象であった D と交際を始めた。つまり、Co と A の二者関係において、A にとっての自己対象機能を果たしていた Co が、共感的応答で A に関わったことにより、A の鏡映自己対象欲求が成熟し、自己の凝集性が高まったので、まだ手つかずであった太古的な理想化自己対象欲求の発達が再活性化されたと考えられる。その後、D と別れることで、A は太古的な鏡映自己対象欲求と理想化自己対象欲求が満たされないことによるこれまで最も深い不全感を体験することになった。しかし、この不全感を Co が丁寧に共感することで、A は自己対象欲求を成熟させて、野心をもって才能を発揮する方向に軸足を置き替え、卒業論文や就職活動に打ち込むことができるようになった。

そして第 3 期には、A の自己の凝集性が高まったことで、Co と A との間の自己対象転移が薄れ、A は I に対して成熟した鏡映自己対象機能と理想化自己対象機能を求める「アイデンティティのための恋愛」を展開させ始めることができた と推察される。

このように、A の自己対象となった Co が、A の太古的自己対象欲求の不全感に共感し続けたことにより、A の自己対象欲求を成熟させて、自己の凝集性を高めるとともに、A の恋愛関係の発達を促したと考えられる。

(4) 恋愛関係以外における A の凝集的自己

A の自己の凝集性が強固になったことは、以下に示す恋愛以外の場面にも効果をもたらしていたと考えられる。

まずは、学業面であるが、A は、自己の凝集性を強固にしたことで、卒業論文作成と就職活動において、恋愛での心理的危機を繰り返すたびに、気持ちを切り替えて、自分の意思に沿って作業を進めることができていた。その結果、最終的に卒業論文を無事に完成させて、就職先も希望どおりの会社への就職を決めることができた。

さらに、同性との友人関係や母親との関係においても、A は、自己の凝集性を強固にしたことで肯定的な変化を見せた。来談当初の A は同性との友人関係が表面的であり、深い関係を作ることが困難な状況であったが、就職対策講座をきっかけに 1 人の女子学生と信頼関係を構築し (#45)、最後は SNS 上で知り合った同年代の女性 2 人

と信頼関係を形成することができるまでになった (#87)。

一方、母親との関係においても、最初は母親への不満や怒りに囚われていたが、就職内定を得た頃には、母親の影響を特段気にしなくなるという変化を見せた。これは、自己の凝集性が強固となり、自己対象欲求が成熟したことで、母親への太古的自己対象欲求をほぼ放棄できた証であると考えられる。

なお、指導教員との関係不和については、A が卒業間近で関係修復を目指して必死に努力をしたにも関わらず、解消されないままとなってしまった。A によれば、指導教員に対して、ふてくされた態度など、幼稚な言動を繰り返していたとのことであり、これらの言動が指導教員との関係悪化につながったと考えられる。こうしたことと合わせて、#48 と #49 にて、A が指導教員への不満と母親への不満を並行して語っていたことから考えると、A は、指導教員に母親を重ね合わせて、指導教員に太古的な自己対象欲求を満たしてもらうことを求めていたのではないかと推測される。そうした意味では、A が示した「自己のための恋愛」から「アイデンティティのための恋愛」への恋愛関係の発達は、自己の一定の発達を示唆するものの、母親との関係における自己対象欲求が満たされないことによって疎外された自己の発達は、今後も A が取り組むべき課題として残されていると考えられる。

5. おわりに

A は恋愛問題の解決を主訴としたカウンセリングの中で Co に自己対象転移を向けて、太古的自己対象欲求が完全に満たされないことによる不全感を Co から共感されることにより、太古的自己対象欲求から、ほどほどの満足で良いとできる自己対象欲求に成熟させて自己の凝集性を獲得した。また、恋愛関係も「自己のための恋愛」から「アイデンティティのための恋愛」へと発達を遂げた。

大野 (1999) が指摘しているように、「アイデンティティのための恋愛」を、その先の唯一無二の独自の存在として認め合う「愛」に発達させるためには、特定の他者と多くの時間をともに過ごすことが求められる⁽²⁷⁾。特定の他者と多くの時間をともに過ごすためには、自己の凝集性を一層高めることが求められる。今後、A が自己の凝集性を高めて、「アイデンティティのための恋愛」を「愛」に発展させていくことを心より願っている。

一文 献一

- (1) 相羽美幸「大学生の恋愛における問題状況の特徴」『青年心理学研究』23 (1), pp.19, 2011
- (2) 高坂康雄「青年期における“恋人を欲しいと思わない”理由と自我発達の関連」『発達心理学研究』, 24, pp.284-294, 2013
- (3) 杉村和美「関係性の観点から見た女子青年のアイ

- ンティティ探求:2年間の変化とその要因」『発達心理学研究』12 (2), pp. 87-98, 2001
- (4) 大野 久「人が恋するという事」佐藤有耕編著『高校生の心理:1 広がる世界』大日本図書, pp. 76-77, 1999
- (5) 前掲 (4), pp. 81-82
- (6) 前掲 (4), pp. 82
- (7) 中島由恵 用語解説 Erikson, E. H. *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press, 1959. 西平直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房, pp. 220-228, 2011
- (8) Erikson, E. H. *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press, 1959. 西平直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房 pp. 174, 1977
- (9) 前掲 (8), pp. 3
- (10) Kohut, H. *The restoration of the self* International Universities Press, 1977. 本城秀次・笠原嘉監訳『自己の修復』みすず書房, pp. 75, 1995
- (11) Kohut, H. *How does analysis cure?* The University of Chicago Press, 1984. 本城秀次・笠原嘉監訳『自己の治癒』みすず書房, pp. 135-145, 1995
- (12) 前掲 (10), pp. 64
- (13) Wolf, E.S. *Treating the Self: Elements of Clinical Self Psychology*. The Guilford Press, 1988. 安村直己・角田豊訳 新装版自己心理学入門ーコフートの実践ー. 金剛出版, pp. 211, 2016
- (14) 前掲 (11), pp. 135-145
- (15) 前掲 (11), pp. 268-269
- (16) 前掲 (13), pp. 72-73
- (17) 前掲 (11), pp. 292-293
- (18) 前掲 (11), pp. 270
- (19) 前掲 (11), pp. 212-215
- (20) 前掲 (11), pp. 73
- (21) 前掲 (10), pp. 2-3
- (22) Siegel, A. M.. *Heinz Kohut and the psychology of the self*. Routledge, 1996. 岡 秀樹訳 コフートを讀む, 金剛出版, pp. 166, 2016
- (23) 前掲 (10), pp. 107
- (24) 前掲 (11), pp. 6
- (25) 前掲 (13), pp. 118
- (26) 前掲 (10), pp. 105
- (27) 前掲 (4), pp. 89

アの方々に深謝いたします。

一謝 辞一

本事例の研究発表を許可してくださったAさんに心より感謝申し上げます。なお、本事例は日本学生相談学会第34回大会で発表したものです。当日座長を引き受けてくださった先生をはじめ、貴重なご意見を下さったフロ